

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-1113
施設名	しらさぎ保育園
施設所在地	板橋区成増5-19-40
法人名	社会福祉法人 興善会

1. 活動のテーマ

<テーマ>

身近な自然

<テーマの設定理由>

当園の豊かな園庭環境等から、生き物に出会い、飼育する姿が多く見られている。飼育するにあたり、図鑑や写真だけでなく、実物をより観察し、探究していけるよう電子黒板の導入を検討した。小さな生き物を間近で見たい思いから、小さな飼育ケースに顔を寄せ合って観察したり、生き物を愛でたりする姿が見られていたため。

また、その発見したことを多様な表現方法で楽しんでいけるようにするため。

2. 活動スケジュール

令和7年4月から令和8年3月まで通年を通して探求していく。

特に春から秋にかけては身近な虫や草花と出会う機会が多いため、子どもたちの発見、興味を深め、他児と共有できるように重点的に行っていく。

また、通年を通してサポート講師に入ってもらうことで、子どもたちの表現活動の環境構成等へ助言していただく。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ・電子黒板が子どもたちにとっても身近なものとなるよう目に触れる場所に設置しておく。
- ・虫、植物等を採集できる入れ物を保育室に準備しておく。
- ・虫や生き物を飼育できる飼育ケースを準備する。
- ・興味を広げ、深められるよう絵本や図鑑なども保育室に準備しておく。
- ・身近な自然の中で表現遊びができるよう画用紙やテープ、描画材などをコーナーに設ける。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

園庭遊びでつかまえた虫、植物等を飼育ケースに入れて観察。子どもたちが興味を持って顔を寄せ合う姿が見られたため、電子黒板のカメラ機能を使い、黒板に映し出してクラスみんなで観察した。小さくてなかなか見えづらい部分を拡大し、観察することで対象の虫、植物等についてより理解が深まる。また、身近な自然に生息するトカゲ等の餌について子どもたちと一緒に考え、調べることをきっかけに、園庭にてトカゲの餌探しをするなど、ICTを用いながら、実体験へと繋げていく。また、園庭や戶外活動で見つけた自然や生き物の観察から、様々な素材を使った遊びへと繋がっていくよう環境を用意しておく。見て感じたものを、造形表現したり、そこから生まれる他者との関わりが深まり、ごっこ遊びへと発展していく。

その他、園では食育活動の一貫として野菜を育てたり、園庭にある木から柿などを収穫して食べることも行っている。普段自分たちが食べている食材を直接触ったり、葉や実を拡大して映してみたりして、食事に興味を持てるようにする。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

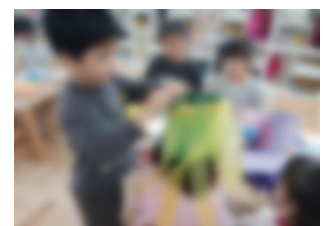
導入した電子黒板に興味津々な様子の子どもたち。保育室で飼育し始めたトカゲが画面に大きく映し出されると感嘆の声をあげる。どの子も保育者が声を掛ける前から「足が見える」「ぺろってしたよね」気付いた事を口にし、近くの友だちと発見したことを共有し、喜ぶ様子が見られた。

呼吸をすることで動いている喉周辺の小さな動きに着目し、「なぜ動いていると思う？」と子どもたちに保育者が尋ねた。子どもたちは言葉にできないながらも、わくわくした表情を見せていた。保育者がみんなと同じように呼吸をし、『生きている』ということ伝えると、「生き物」と認識する様子が見られた。また、食べものは何かと尋ねたところ、思い思いに口にしている様子が見られ、内蔵されている検索機能を使い、画面上で調べてみると、様々な虫の写真が出てきた。

検索したものが画像として可視化されることで、イメージの共有が容易であった。画像上にワラジムシが出てきたことで、「園庭で見たことある！」と興奮気味に話す児をきっかけに、クラスみんなで園庭へ出かけ、ワラジムシ探しがスタートした。

普段から園庭で虫探しをしている子たちはどんな所にいるかをよく理解しており、得意げに採集していた。ワラジムシによく似ているダンゴムシとの見分けが難しいようで、集めたワラジムシの中にダンゴムシも多く採集されていたが、餌探しから虫探しへと発展し、様々な昆虫との出会いを楽しんでいる様子が見られた。その後虫に興味を持ち、ダンゴムシの家や迷路を作るなど、表現遊びへと発展していく姿も見られた。これは、継続的に子どもたちが観察や探索活動、表現あそびが各々の興味に合わせて主体的に活動できるからこそ生まれたのだと感じる。

また、葉っぱやドングリ、木の実などの自然物とは普段から関わり親しんでいる。戸外では採集した物を使って自然と「いらっしゃいませ～」とお店屋さんごっこが始まる。葉の上に乗せた木の実をアイスなどに例えたり、その品物を買う為のお金になったりと、採集した自然物との多様な関わりが繰り広げられていた。集めたものを袋に入れて持ち帰る子もいれば、保育室で粘土に張り付けたり、モール等と組み合わせたりしてアクセサリー作りにも発展させる子もいる。集めて終わりにはならないよう、子どもたちがそれを用いて表現遊びができるよう保育室にコーナーを設けておくことはもちろんだが、子どもたちの表現したい気持ちがすぐに叶えられるよう園庭にも物作りができるコーナーを子どもたちの様子に合わせて設けていった。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

小学校から一人1台のタブレットを活用する時代のなか、保育において、子どもたちがICTと関わることの難しさを感じていた。就学前の学びとして、様々なことや物とふれあい、実体験を積むことが大切であると思っているが、子どもたちの言葉にならないイメージの共有や、興味関心を深めるツールとして取り入れることは、子どもたちにとってもメリットのあることだと感じた。様々なこどもが育ち合う保育園という場で、言葉だけではイメージが持てなかったり、参加し辛かったりする子も、興味関心を共有できることで、一人ひとりのきっかけにもなり、子どもたちの繋がりが広がったように感じる。

上記の活動記録として挙げたものは、飼育物との関わりを主に記載したものであるが、年間を通して、補助機器としても活用したり、食育活動等との学びを深める機器としても活用することができた。可視化できるからこそ、イメージが固執してしまわないよう配慮すると共に、個々の思いが多様に表現できるよう努めていかなければならないと感じた。

そのためには、電子黒板をうまく活用しながら、子どもたちが言葉、身体（運動）、造形など様々な表現を楽しんでいけるよう、環境構成を整えていく。

また、自然物等との関わりがどの年齢でも通年見られていた。発達によって関わり方は様々であるが、子どもたちにはその物を通して他者との繋がりが生まれていた。言葉にならないが表情で発見した喜びを保育者と共有したり、友だちとのやり取りが生まれたりしていた。また、様々な経験をしてきている幼児では、その物を使った表現遊びが多様に行われていた。表現したいものによって、用途に合わせた素材選びができるようになってきている。そのためには、日頃から様々な素材と関り、選択的に遊びに取り入れていける環境、コーナーが必要だと感じた。引き続き、子どもたちが選択的に遊び込める環境を整えていきたい。